持続可能な町内会に向けて

知っていますか？ 町内会の危機

高齢化、共働き世帯や単身世帯の増加など社会構造の変化により、**加入率の低下や担い手不足が深刻化**し、**一部の町内会は解散を決断せざるを得ないほど事態は深刻**です。

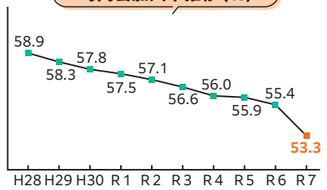
町内会はごみステーションや街路灯の維持管理、高齢者の見守りや美化活動など、市民の安心・安全な暮らしを支える大切な役割を担っており、孤独・孤立が社会問題化する中で、最も身近なコミュニティとして重要な存在です。

地域を支える町内会が今後も存続していくにはどうすればよいのか。進むべき方向性を見出すために市民の皆さんに協力していただき、町内会に関するアンケート調査を実施しました。そのアンケート結果の一部をご覧いただくとともに、持続可能な活動のために新しい取組みに挑戦している町内会の事例を紹介し、今後の町内会の在り方を考えます。

町内会数推移

10年間で町内会数が**42**減少

町内会加入率推移（%）



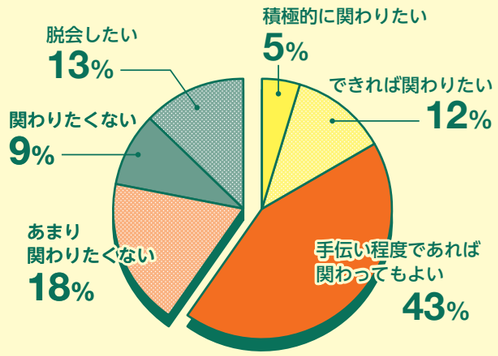
10年間で町内会加入率が**5.6%**減少

【詳細】地域活動推進課☎25・6012

＼市民の皆さんに聞きました／

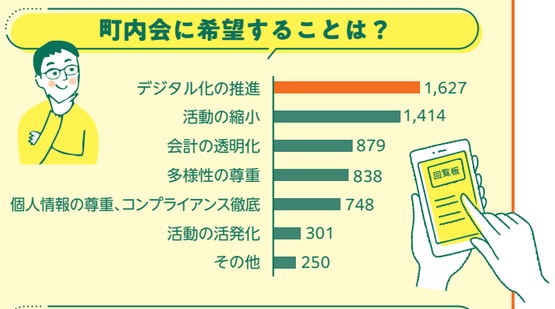
町内会はどうすれば？

今後、町内会に関わっていきたいですか？

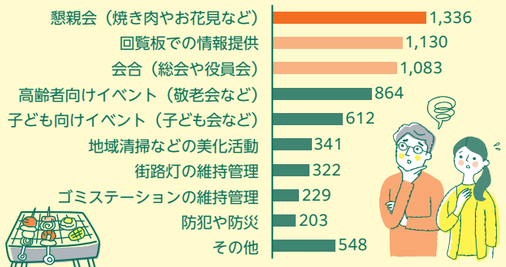


町内会に対する市民の思いを調べるため、市民を対象にインターネットを通じたアンケート調査を実施しました。その結果、「積極的に関わりたい」「できれば関わりたい」「手伝い程度であれば関わってもよい」の回答は合計６割に上りました。

町内会に希望することは？



無くした方がよいものは？



町内会との関わりに肯定的な方が半数以上で、また、活動の負担軽減やデジタル化を求める意見が多いことが分かりました

アンケート結果の詳細はこちら

＼町内会の新しいカタチ／

負担軽減に向けて歩み出している町内会

1 デジタル化への挑戦

市民アンケートでも多くの方が希望する**デジタル化を進め、町内会業務の負担軽減のために無料で活用できるツールが「あさひかわ　くらしのアプリ」**です。アプリでは、回覧板の電子化や役員同士のチャット、簡単なアンケートなど、町内会が活用できるさまざまな機能があります。このアプリを活用して、実際に集まらずチャットで連絡を済ませたり、紙の回覧板を廃止したりする町内会も出てきています。

町内会限定機能を使うためには市への届出が必要です。役員だけで使ってみたいなど、お試しでもご利用いただけます。市HPからも届出が可能です。詳細は**地域活動推進課☎25・6012**

末広八親町内会会長
中村雅彦（なかむらまさひこ）さん

すでにアプリを利用している末広八親町内会では、役員業務の効率化と会員の負担軽減のために、電子回覧板の導入などのデジタル化に取り組んでいます。紙の回覧板も継続して活用していますが、アプリの利用者からは「**いつでも情報が見られるので便利になった**」などの意見があったそうです。

町内会長の中村さんは、「**アプリの導入はこれからの時代には必須になります。信頼関係を築きながら、地道にコツコツとデジタル化を定着させることが、成功のカギになると考えます。**」と語ってくれました。

2 外部の力をお借りして

業務の負担を少しでも軽くして、誰でも気軽に参加できる、持続可能な町内会活動を目指して、**業務の一部を外部に委託**する町内会も出てきています。春光台の北斗町内会では、町内会の業務を受託する事業を行っている会社の高塚さんと打ち合わせ。イベントの企画や経理事務などを外注できないか検討中です。

このほかにも、地域のお祭りに自分たちで焼鳥を焼くのではなく、キッチンカーに来てもらってグルメを楽しんだり、司会進行をプロにお願いしたりする町内会もあります。外部の人材は専門的な知識や人脈、経験を持っているので、思わぬ負担軽減のアイデアや新しい企画が生まれる可能性もあります。

北斗町内会の打ち合わせの様子

3 新たな連携で地域を元気に

地域の住民だけで負担を背負うのではなく、**学校や企業、ＮＰＯ、ボランティアなど新たな担い手と連携して取組みを行う**のも１つの方法です。新たな担い手の参加は、負担を軽くするだけでなく、地域の活性化にもつながり、地域活動を持続可能にするために有効な方法です。

永山地域で開催される、旭川を代表するお祭りの１つ「永山屯田まつり」。若い人達にも参加してもらおうと、地元にある旭川市立大学に参加を呼びかけたところ、30人を超える学生や教員が参加してくれることに。地域の人から踊りを教えてもらって、祭り当日は会場を大いに盛り上げました。ほかにも町内会のイベントのチラシ作りを学生が手掛けたり、こども食堂のお手伝いに参加したりと、さまざまな形で大学と地域の連携が進められています。

練習風景（永山第二市民委員会）

「やっぱり地域のつながりは大切」

旭川市立大学保健福祉学部の大野剛志ゼミでは持続可能な町内会の在り方に関して研究しています。今回は、研究で実地調査の経験があるゼミ生にお話を聞きました。

調査の概要を教えてください。

武藤　町内会長、役員や住民の方々を対象として、「町内会の維持継続と活性化の秘訣を探る」をテーマにインタビューやアンケート調査を実施しました。

調査期間は令和6年1月下旬～2月中旬、令和7年8月下旬～12月下旬の2か年にわたり行い、市内はもとより道内外を含め11事例地で調査取材を実施しました。

調査結果から見えた「地域のつながり」の必要性をどう考えますか？

吉田　連携力こそが、地域のつながり無しでは得られないものであると思います。

例えば、普段から子供や高齢者を含めて、お互いに見守り合えるように住民同士が協力できる環境が整っていれば、何かあったときでも早期発見、早期対応をすることができます。こうした他では代替し得ない連携の形が地域のつながりには込められているのです。

閻　町内会では清掃活動、除雪活動などさまざまなことに取り組み、地域でつながっています。これらは単に住環境が良くなるというだけではなく、ともすれば孤立しがちな現代において自分の居場所が得られる一面もあったり、結果として体力増進や、さらには記憶力も高めるなど健康に結びつく可能性もあります。

旭川市立大学保健福祉学部コミュニティ福祉学科
大野剛志ゼミナール（地域社会学研究室）3年
吉田怜央（よしだ れお）さん　閻（えん） 啓智（けいち）さん　武藤礼皇（むとう れお）さん

「地域のつながり」を維持するにはどうしたらいいと思いますか？

吉田　調査した町内会の中には、地域に住む人たちがお互いの状況は大体分かっているところもありました。町内会を、形だけではなく、実質的に機能させていくためには、そのように身近にいる人の顔、名前を知っていることが重要なのです。それにより災害時にスムーズな連携を取ることができるなど、この組織の役割が発揮しやすくなります。

そのためには、普段からの交流も意味を持ってきますし、さらに互いの結びつきを強くするという観点からもイベントなどの開催は効果があります。例えば、盆踊りやジンギスカンパーティーなど、皆さんも実際に参加した経験があるかもしれませんが、自然に人と人とのつながりが促されるのです。

武藤　市内の桜岡にある町内会を調査した際に印象に残っているのが、従来、完全なボランティアで行っていた雪かきや地域の支え合いが、費用が発生する有償ボランティアとして継続できていることです。

地域の中で活発に動くことができる人は、仕事などで忙しい場合も多く、無償だと引き受けるきっかけに欠く場合もあります。だからこそ、有償にすることで関わり合いが生まれるという逆説的な取組みを行うことが、手段として有効になってくるのです。

このほか、定期的な関わり合いができる町内会は上手くいっています。人と人とが直接会う場が定期的にあることによって町内会に対する思いが強くなる一因になります。

会員の中には、何かやってみたいと思っている人はいるはずで、そうした方にまずは参加してもらう、それを積み上げることが持続可能な町内会には必要です。そのためには、町内会活動を明確化して伝えることが大事で、私はこれをサークル活動の勧誘と一緒だと考えています（笑）。

町内会での負担軽減には何が必要ですか？

武藤　ある町内会長から、いろいろな役職に就いていてとにかく多くの会議に出なければならないとの声を聞きました。こうした場合にはICT技術の活用、特にオンライン会議の導入が非常に効果があります。

また、仕事をしている人などは、日中家にいない場合もあり、回覧板などの紙媒体では見られずに流されてしまう可能性も高いです。そのため、メールで連絡したり、アプリを活用するなどの方法が大事になってきます。

閻　1人が何役もこなすのではなく、それぞれの得意分野を生かせるようにするべきです。私たち学生は、デジタル分野が得意だと思いますし、身体を動かすことが得意な方もいます。地域の方々がそれぞれ得意な分野を生かせるような状況になれば、互いの負担軽減にもつながりますし、やりがいの喚起にもつながると思います。